

グレン・アイラ市に住む高齢女性の 暮らしとライフヒストリー (その2)

野邊 政雄

メルボルンのグレンアイラ市に住む6人の高齢女性に、①日常生活、②ライフヒストリー、③何に幸福感を感じるかの3点に関して聞き取り調査を2005年9月におこなった。本稿では6人の語りを提示し、それに考察を加えた。

Keywords : 高齢女性、メルボルン、パーソナルネットワーク、主観的幸福感、ライフヒストリー

(3) マリリンさん

マリリンさんは1940年生まれで、英国国教会 (Anglican Church, Church of England) の教徒である。夫は1935年生まれである。夫婦とも若いときに仕事に就いていたが、現在はともに退職して無職である。夫婦の間に、息子と娘が1人ずついる。マリリンさんは夫婦で一軒家に住んでいる。弁護士をしている独身の娘がすぐ近くにいる。娘は多忙であるので、マリアンさんは何かにつけて娘を助けている。マリアンさんの母親はまだ生きており、老人ホームで暮らしている。マリリンさんはその母親の面倒もみている。マリリンさんは家の事をいろいろ計画し、切り盛りし、なし遂げたりすることに生き甲斐を感じている。

マリリンさんは自分の健康状態を2と評価していたから、健康状態は比較的良好といえる。また、ロートンの活動能力指標によれば、彼女は10項目すべてを「問題なくできる」と答えていたから、活動能力はとても高いと判定できる。マリリンさんのパーソナルネットワークは、夫、息子と娘、自分の妹、2人の夫の兄弟、4人の友人から構成されている。息子は「メルボルン」に、娘は「近隣地域」に住んでいる。本人の妹と2人の夫の兄弟は「メルボルン」にいる。4人の友人のうち、3人は「サバーブ」に、1人は「メルボルン」に住んでいる。ロートンのPGCモラルスケールの得点は14点と、幸福感は比較的高かった。

マリリンさんの年譜は、表3のようである。

①日常生活

夫のバリーは70歳で、私は65歳です。私の母親はまだ生きていて、老人ホームに入っています。ですから、私は自分を典型的な老人だとは思いません。私は夜更かしです。昨夜はベッドで読書をしたりして、午前1時ころ寝ました。朝は9時に起きます。毎朝たいてい、私は夫のベッドに朝食を持って行ってあげます。朝起きると、動物に餌をやりませう。犬を1匹と猫を3匹飼っています。大きな犬なので、裏庭で飼っています。そのあと、家の掃除をし、買い物をしませう。今日は娘が家のブラインドを買いに行ったので、ついて行ってあげました。帰宅後、夕食を作りました。明日は、この家の掃除をする予定です。あさっての日曜日には、貸家の掃除と修理をしませう。その日は父の日ですから、息子の家でバーベキューをしませう。

昼間は忙しくて、テレビを見ませう。夕食を料理するときに、クイズショーなどを見るくらいです。私は料理が得意です。毎日、夕食を6時45分から7時に食べませう。夫も私も夜に外出するのは好きではありません。テレビを見てリラックスしたり、コンピューターをしたりしませう。私は夜に家にいるので、友人たちが電話をかけてきたりしませう。人を夕食に招待するのは土曜日にし、バーベキューは日曜日にしませう。友人たちも多忙です。誕生日とか何かの記

念日とかは別ですが、友人たちをレストランではなく自宅に招きます。かつてはソーシャル・クラブやレストランによく行きました。でも、年を取ったので、ここ数年は、人をレストランに招くよりも家に招くことが多くなりました。1ヶ月に2回ほど人を家に招いています。おいしい食事とたくさんのワインでもてなします。来た人は歩いて家に帰ります。娘も私たちと同じように自宅に人を招くのが好きです。

この家の他に、私たち夫婦は10年前から近くに貸家を持っています。その家ができたとき、娘がそこに住んでいましたが、少し前にその家を出ました。この頃では、私はたいてい火曜日、水曜日、木曜日にその家に泊まって、その家を他人に貸せるように、掃除、修理、庭の手入れなどを行っています。電気工事業者など呼んで、修理をしてもらわないといけません。その家はここ3ヶ月間ほど人に貸していません。

週に1度、老人ホームにいる母親に会いに行きます。会いに行くのは、水曜日のことが多いです。老人ホームはマックロード (Macleod, メルボルンの北にあるサバープ。都心から北東へ15キロのところにある) にあります。老人ホームはメルボルンの中でここは反対側にありますから、そこに行くのに電車で2時間かかります。(グレン・アイラ市はメルボルンの南にある。) 駅で降りてから老人ホームまで15分ほど歩きます。いい運動です。その老人ホームには60人ほどが入っています。老人ホームに2時間ほどいます。老人ホームでは老人たちは工芸の作業をしています。私はそれを手助けしています。老人ホームでは今クリスマスカードを作っています。私はクリスマスカードの見本を集めて、老人ホームの人に渡しています。遠方に住んでいすから、これくらいのことしかしてあげられません。母親は97歳で、老人ホームに18ヶ月入っています。母親は数ヶ月前に老人ホームで転倒して、あごやおの骨を折ってしまいました。そのときは、看病に毎日のように老人ホームに行かねばなりません。母親は以前フラット (数戸の家を1棟に建てつらねた長屋式の家) に住んでいて、私はそこを訪問していました。そのフラットはまだそのままにしてあり、甥に貸しています。その家賃で老人ホームの費用をまかなっています。私はそのフラットの管理や世話もしないといけません。母親が入っている老人ホームから葉などの請求書が来たら、その支払いもします。

バリーは外食をするのが好きです。私たちは1週間に1度くらい外食をします。近くにあるベントレ

ー・クラブ (Bentleigh Club, ベントレーにあるソーシャル・クラブ) に木曜日の夜に行き、夕食を食べます。木曜日の夜は2品の料理とワインが付いて12ドルとなります。夫はその後とスロットマシン (Pokie) で遊びます。お金をすってしまうのがいやですから、私はそれをあまりしません。夫は20歳のときに、このクラブのメンバーになりました。今では、夫でなく、私がメンバーとなっています。年会費は25ドルです。

息子が10歳のときに、ヨット競技を始めました。そのときから今までずっとロイヤル・メルボルン・ヨット・スクアドロン (the Royal Melbourne Yacht Squadron, ヨット・クラブ) のメンバーです。このヨット・クラブは、120年の歴史があります。娘もヨット競技をしています。私たち夫婦はヨットをする子供たちのためにカンパ活動をしました。私たちの子供たちはシドニーとホーバート (Hobart, タスマニア州はビクトリア州から南に約300キロのところにある島であるが、ホーバートはタスマニア州の州都) 間のヨットレースにも参加しました。そのとき、娘は副艇長をしました。私たちは無線で船をモニターしたりしました。私たち夫婦は1ヶ月に1度ヨット・クラブのレストランに金曜日の夜のサービスタイム (happy hour) のときに行きます。料理は素晴らしいのですが、値段が高いので、そこではあまり食事をしません。ヨット・クラブはセント・キルダ (St. Kilda, メルボルンの中心から南東に5キロほどのところにある、海岸に面したサバープ) にあって何よりも雰囲気がいいのです。

私は家系研究 (genealogy) に関心があります。メルボルンの都心に家系研究会 (Genealogy Society) の事務所がありますが、私はそのメンバーです。でも、この家の世話、貸家の世話、娘の家の世話、母親のことなどで忙しくて、思うように活動できません。夫の弟は夫方の家系を調べています。私は彼とパソコンを使って電子メールで連絡を取り合います。私は母方の家系を20年間にわたって断続的に調査をしています。コンピューターを使って調べています。一日中コンピューターで調査していたこともありますが、最近は忙しくてそれほどできません。州立図書館には家系についての部門があります。素晴らしい資料がありますが、最近では行っていません。家系研究会が開いている講義にかつては1週間に1度通っていました。とてもいい講義でした。家系研究会に、親しい友人はいません。

バリーはローンボール (lawn bowls, 木球を芝生の上に転がしての的球になるべく近づけようとする競技) とゴルフをします。競技シーズンとなったので、

バリーは練習を始めました。

私たち夫婦はギプスランド（Gippsland, ビクトリア州の東部地域）のある島に別荘を持っています。そこへは車で4時間かかります。私はそこに行くのが好きです。老人ホームにいる母親のところに行ってあげないといけないので、今年はまだ3回しか別荘へは行っていません。別荘の家具はオークションでそろえました。（インタビューをしている）この机もオークションで買いました。以前は1週間に1度オークションへ行っていました。

この15年間よく旅行をしました。アメリカにいる友人はアメリカに来るように言ってくれますが、アメリカへはまだ行ったことはありません。ハワイまでです。しかし、母親のために、最近では旅行に行けません。私には妹が1人います。妹はフルタイムで働いているので、母親の世話を妹に任せられません。

2人の子供がいます。娘は43歳で、息子は41歳です。娘は隣の通りにある家に住んでいます。娘は弁護士としてフルタイムで働いています。娘にパートナーはいません。ときどき夜10時まで働くほど多忙です。女性が専門職の仕事に就いて、家を持って、自分のことをすべてやってゆくのはたいへんなことです。ですから、私は娘をいろいろと助けてあげています。今日、娘は休みを取って、ブラインドを買いに行きました。私はそれについて行ってあげました。この他にも、彼女の家のことをいろいろとあげたりしています。先週は、娘の家の電気が切れてしまったので、電気工事業者を呼んで直してもらいました。娘は貸家を持っています。家を借りている人が裏戸を新しいものに代えないといけないと言うので、今、バリーが貸家を見に行っています。私は娘をいろいろと助けてあげていますが、逆に、娘が私を助けてくれることもあります。娘とは何でも言い合えます。娘とは母と子の関係というよりも、友人のような関係です。彼女は私にとってもよくしてくれます。娘はとても静かな人間で、あまり話をしません。でも、目立ったことをして、それを鼻にかけるようなところがあります（hoity-toity）。娘は黒い日本式の家を建てました。まわりの家々と違って、近所ではとても目立っています。娘はそれを自慢しているのです。もし娘に夫と子供がいたとしたら、娘は家族とすごさないといけなくなりますから、友人とはそんなにつきあえないでしょう。娘には韓国人の女性の友人がいます。その女性の夫はモナシュ大学（メルボルンにある大学）の教授をしています。その女性の知り合いが韓国から来るときなどに、娘は自宅へ夕食に招待したりして、知り合い

をもてなします。私は娘の友人たちと食事を一緒にしたりします。

息子はハンプトン（Hampton, メルボルンの中心から南東に15キロほどのところにあるサバーブ）に住んでいます。息子には3人の子供がいます。10歳、7歳、4歳です。1ヶ月半に1度ほど子守に行き行ってあげます。先週も子守に行き行ってあげました。孫たちが私たちの別荘と一緒にいくこともあります。以前、息子はこの家に頻繁に来ていました。職場がメルボルンの都心になって、（自動車通勤から）電車通勤となりました。そのために、最近では以前ほど来なくなりました。息子の妻は少し変わった女性で、私には親しく接してくれません。ですから、息子との関係はあまりよくありません。バリーは息子と良い関係です。数日間一緒にボートに乗って魚釣りをするというように、よく一緒に何かをします。息子の妻は息子がヨットに乗るためなどに数日家をあけるのをいやがります。息子の妻はバリーとも仲がよくありません。

私には妹がいますが、妹とは姉妹の関係というよりも、友人のような関係です。妹とは何でも言い合えます。言い争っていても、すぐに普通の話し方に変わります。私にとって、娘と妹との関係はとても大切です。夫のバリーとは一日に3食を一緒に取るほど、生活をともにしています。でも、私はバリーに頼ることはありません。私が夫に個人的な事を相談しても、彼は「何をしたらいいんだ」などと答え、関心を示してくれません。やはり夫は男性で、そういったことに関心がないのでしょうか。

マーガレットとベベリーという親しい2人の友人がいます。（2人ともマリリンさんと同じサバーブに住んでいる。）マーガレットとは週に2回ほど電話をしあい、ぼやき合ったり、不平不満を言い合ったりします。ベベリーとは何でも話し合え、2時間ほど電話で話をしたりします。マーガレットやベベリーとは個人的な話をします。娘、妹、マーガレット、ベベリーと親しい人はすべて女性です。この他にも、多くの知人（acquaintance）がいます。アメリカの知人は2年に1度オーストラリアに来て、3ヶ月ほど滞在します。この知人がこの前に来たときは、一緒にクィーンズランド、ヌーサ（クィーンズランド州にある海岸地帯ゴールド・コーストの代表的な町）、シドニーに行きました。

コンピューターの電子メールで連絡を取り合っている友人が、クィーンズランド州、アメリカ、韓国にいます。2日に1度は電子メールを開けて、メールを読んでいます。電子メールを読んだり、それに返事を書いたりしているとすぐに時間がたつてしま

いますから、毎日電子メールを開けないようにしています。電子メールを開けるときの、午後3時半からにして、夕食前にはそれを終わらせるようにしています。1週間に1度ほど電子メールで連絡をし合っている人は10人くらいいます。電話だったらこんなに頻繁に連絡をし合いません。それほど親しくない友人へ頻繁に電話することはできませんが、電子メールなら頻繁に連絡をしても失礼とはなりません。そのうえ、電子メールなら25セントですんでしまいます。10人以外にも、それほど頻繁ではありませんが、連絡を取り合っている友人がいます。家系を調査しているということで、夫の弟とは電子メールで頻繁に連絡を取り合っています。コンピューターが好きです。電子メール以外のことも、コンピューターでしています。コンピューターのクラスにかつては通っていました。6年間、コンピューターをしています。私はこれまでにインターネットによる売買 (E-Bay) でいろいろなものをこれまでに買いました。娘の家や私の家にたくさんの不要品があります。今度、インターネットでそれらを売りに出してみようと思っています。店やオークションで買うよりもインターネットで買うことが今では多くなってきました。

いろいろとやりたいことがありすぎて、時間が足りません。決まった日課はありません。いつ老人ホームにいる母親を訪ねるかも決まっています。

② ライフヒストリー

私は4代目のオーストラリア人です。カールトン (Carlton, メルボルンの中心にあるサバープ) にあるウィミンズ・ホスピタル (Women's Hospital) で生まれました。当時、大恐慌がありました。今のような社会保障がなく、失業している人々は政府が提供する給食で食いつないでいました。当時、多くの若者は安定した仕事に就けるまで、結婚をのばしていました。私の両親もそうでした。そのために、母親は30歳を過ぎてから、私を生みました。私が一

番上の子供でした。私が生まれたとき、両親はノースcott (Northcote, メルボルンの中心から北東に数キロの都心近くにあるサバープ) に住んでいました。まもなくしてフェアフィールド (Fairfield, ノースcottの東隣のサバープ) に移り、子供時代はそこですごしました。私が赤ん坊であったとき、父親は戦争に行きました。父親は第2次世界大戦に4年間にわたって従軍しました。父親が戦争から戻ってきてから、妹が生まれました。妹は今62歳です。

私は地元の学校に行きました。フェアフィールド小学校 (Fairfield Primary School) とコリングウッド女子中等学校 (Collingwood Girls Secondary College) です。そのあと、メルボルンの中心のエリザベート・ストリートにあるビジネス学校へ1年間通って、タイプと秘書の仕事を勉強しました。当時の子供たちは、今と違って、あまり長い間学校へ行きませんでした。16歳のときに、ガーディアン保険会社 (Guardian Securities) に入社しました。船舶保険部で船舶保険の仕事を2年間しました。そのあと、ビクトリア州教員組合 (Victoria Teachers' Union) に勤めました。学校を出ても、ずっと両親と一緒に住んでいました。私が18歳のときに、両親はアイバンホー (Ivanhoe, メルボルンの中心から北東に9キロほどのところにあるサバープ) に引っ越したので、私も一緒に移りました。

夫のバリーとは19歳か20歳のときにパーティーで知り合いました。21歳のときに結婚をし、ノースcottのフラットに住みました。1年して子供ができました。子供ができてからは、ビクトリア州教員組合の仕事をやめて専業主婦となりました。当時、まわりの女性のほとんどは子供ができたら仕事をやめていました。今の人は自分の思うようにできます。でも、当時は、子供ができて仕事も続けるなんて考えられませんでした。それに、子供たちをテニス、エクササイズ・ジム、ヨット・クラブなどに連れて

表3 マリリンさんの年譜

年 (年齢)	出来事
1940年 (0歳)	出生
1956年 (16歳)	ビジネス学校を卒業し、働き始める
1961年 (21歳)	結婚
1962年 (22歳)	第1子(娘)誕生。専業主婦となる。
1964年 (24歳)	第2子(息子)誕生。
1977年 (37歳)	宝くじの会社で働き始める。
1985年 (45歳)	子供たちがすべて家を出る
1993年 (53歳)	夫婦とも退職
2003年 (63歳)	母親が老人ホームに入る

行ってあげなければなりません。娘が6ヶ月のときに、現在住んでいるこの家に引っ越してきました。子供が学校に行っていたときに、子供をエクササイズ・ジムに通わせていました。その教室で友人のマーガレットと知り合いました。当時は、母親たちの大きなサークルができていて、私はそこに入りました。土曜の夜はパーティーをしたりしました。とてもいい時代でした。子供を幼稚園、小学校、エクササイズ・ジムなどに連れて行くと、近所に住む子供の親に会って、自宅にお茶に招かれたりしました。こうして他の親たちと人間関係が生まれ、子供を介して友人関係の輪が広がってゆきました。

バリーはテレコム（電話会社）で42年間にわたって電話のケーブルなどの配線計画を立てる技師として働きました。子供が大学に入学するとお金がかかります。そこで、子供が中高等学校に入学したとき、宝くじの会社（Tatterslott）で働き始めました。子供が14歳の頃からです。初めはパートタイムで働いていましたが、その後フルタイムで働きました。ビクトリア・マーケット（メルボルンの中心にある大きな市場で、観光名所でもある）にある宝くじ会社の本部で顧客サービス係として10年ほど働きました。そこで、友人もできました。いい時代でした。

息子は18歳のときに家を出て一人暮らしを始めましたが、半年後に家に戻ってきました。息子と娘は共同でウィリアムズタウン（Williamstown, メルボルンの中心から南西に8キロほどのところにあるサバブ。港町である）に家を買いました。息子が21歳のときにガールフレンドとそこに住むようになりました。お金を持っていないのに家を買ってしまうのですから、娘は世間の一般常識を欠いているところがあります。子供たちが家を出て行っても、私たち夫婦の生活に変化はありませんでした。

宝くじ会社の女友達と香港やバリ島などに旅行に行きました。香港で40歳の誕生日を迎えました。子供たちが家を出て、子供たちにお金がかからなくなってから、私は海外旅行をよくするようになりました。クリスマスの時期に子供たちは家に帰ってきました。そのときに、1年に1回ほど友達と海外旅行をしました。バリーは初め海外旅行をしたがりませんでした。私が宝くじ会社に勤めていたときに、「香港は絶対に見ておくべきよ」と言って、バリーを香港に連れて行きました。それから、バリーは海外旅行がやみつきになりました。宝くじの会社の本部は閉鎖されましたが、カールトンにある宝くじ会社の代理店でパートタイムとしてその後2年間勤めました。バリーが優遇退職金（goldenhandshake）

をもらって1993年に58歳で早期退職したとき、私も仕事をやめました。私は53歳でした。それから、外国旅行により頻繁に行くようになりました。イギリスを5週間旅行したことがありますし、バリ島に1ヶ月間滞在したこともあります。

しかし、最近はそれができなくなってしまいました。母親が老人ホームに入ったからです。妹はフルタイムで今も働いていて、子供がいます。そのために、妹は月に4回母親を見舞いに行きますが、長い時間老人ホームにいることはできません。私は母親の代理人となっています。こういったことから、最近では外国旅行に行けなくなってしまいました。

私が退職をした年に、母親のアイバンホーにある古い家を取り壊し、2戸のフラットに建てかえました。年寄りが1人で住むにはその家は広すぎて、母親は家の世話をすることができませんでした。老人が1人で住むのに適当な大きさの家にしたのです。私たちがお金を出して建てかえました。建設費を返してもらうために、前側にあるフラットを売りました。母親は後ろ側にあるフラットに住むことになりました。フラットを建てた後も、フェンスを作ったり、カーテンを買ったり、庭を作ったりすることをしました。家の建てかえに、つごう12ヶ月かかりました。その間、母親は私の家や妹の家にいました。（自立して暮らしたいので、）母親は老人ホームにずっと入りたがりませんでした。でも、1年半ほど前に母親は転倒して、鎖骨を折りました。そのために、しかたなく老人ホームに入りました。老人ホームでも、自立した生活ができるようにフラットに住んでいます。

③何に幸福を感じるか

コンピューターを使ったり、電子メールで友人たちと連絡を取り合ったりするのが好きです。掃除はきらいですが、何かをやり遂げたときに満足感を感じます。忙しいのが好きです。計画を立てて、それをうまくやり遂げたときに、満足感を感じます。退屈などしたことはありません。夜は読書を読みますが、週に少なくとも3冊の本を読みます。ミステリーが好きです。よい本に出会ったときに、満足を感じます。おもしろい新しい著者を探しています。イギリスで製作されたミステリーショーをテレビで見るのが好きです。インターネットを使って、ミステリーの事件の舞台となった場所を調べるのも好きです。イギリスを旅行するときに、そうした場所に立ち寄ってみたいと思います。『ロンドン・タイムス』（*The London Times*）や『ニューヨーク・タイムス』（*The New York Times*）をインターネットで読んで、

世界で今何が起きているかを調べたりします。ただし、自分の関心のある事を調べるだけです。かつては『ハロー』(Hello)というゴシップ誌を取っていましたが、今ではインターネットで読むことができます。

(4) ジュディス

ジュディスさんは1933年生まれで、ユナイティング教会 (Uniting Church, プロテスタント系の宗派である組合教会 Congregational Union of Australia, メソジスト教会 Methodist Church, 長老派教会 Presbyterian Churchが1977年に集まってできたオーストラリア独自の教会) の教徒である。夫は2002年に死亡した。それからは、ジュディスさんは一人暮らしをしている。夫との間に4人の息子と1人の娘をもうけたが、1人の息子はやはり2002年になくなった。夫が生きていたときには、ジュディスさんは夫に頼って暮らしていたので、3年前に夫を失ったショックからいまだ立ち直れないでいる。加えて、息子を失ったショックをまだ引きずっている。ジュディスさんは人生をととても深く考える、知的な女性である。彼女は邸宅とってよいような瀟洒な広い家に住んでいる。庭は広く、正門から家の玄関まで30メートルくらいある。庭の手入れはととてもよく行き届いている。

ジュディスさんは自分の健康状態を3と評価しており、健康状態はまあまあである。ロートンの活動能力指標によれば、彼女は10項目のうち9項目を「問題なくできる」と答えていたから、活動能力は比較的高いと判定できる。ジュディスさんのパーソナルネットワークは、3人の息子、1人の娘、1人の本人の妹、1人の近隣者、1人の友人から構成されている。このように、パーソナルネットワークは近親者が中心である。いずれの人も「メルボルン」に住んでいる。ロートンのPGCモラルスケールの得点は3.5点と、幸福感はととても低かった。

ジュディスさんの年譜は、表4のようである。

①日常生活

毎日、午前7時に起きます。そして、家の門のところまで行って、新聞を取ってきます(家の玄関から正門まで30メートルくらいある)。コーヒーを入れて、トーストを用意します。新聞を読みます。その後、シャワーを浴び、着替えをします。たいてい、毎日、何かの用事で外出します。

月曜日は、午前10時に老人大学 (University of the third Age, U3Aと省略することもある) に行きます。討論の授業や「ニュースと視点」の授業を取

っていて、授業を楽しんでいます。午後2時にカンバーウェル (Camberwell, メルボルンの中心から東に10キロ・メートルのほどのところにあるサブurb) に行き、カウンセリングを受けています。3年半前に夫が亡くなり、3年前には息子が亡くなりました。ですから、私には(精神的な)助けが必要です。

火曜日は、娘、ときには妹と昼食を食べるために外出します。

水曜日は、グレン・アイラのコミュニティ・インフォメーション・センターに行き、ボランティアとして働いています。いろいろ困難な状況にある人々がさまざまな情報を求めて電話をしてくたり、食事券を求めてくたりします。ホームレス、赤ちゃんのいる未婚の女性、ホームレスの少年など恵まれない人たちがそこに来ます。そうした人たちを助ける仕事をしています。電話を受けたり、インタビューをしたり、申請書の書類に記入させたりする仕事です。1日に4時間働いています。6年間、このボランティアの仕事をしています。この仕事を楽しんでいます。

木曜日は、読書会 (book group) の会合に出るために、都心のリトル・パーク通りにある中華料理店に行きます。私はもともと成人教育センター (Centre for Adult Education, CAEと省略することもある) で哲学の授業を受けていました。そのコースが終了したとき、チューターが読書会を持ちましようとして提案をしました。この読書会が6・7年続いています。1ヶ月に1度、読書会はあります。以前、私はリレーションシップス・オーストラリア (Relationships Australia, 結婚についてのカウンセリングなどの支援をする団体で、政府に支援を受けている) という団体でカウンセラーとして働いていました。木曜日に、そこを退職した女性たちと会うこともあります。今でももとの同僚をガールズ (girls) と呼んでいます。もとの同僚とまだつき合いがあります。

金曜日は、メルボルンの都心にあるセント・マイケル教会 (St. Michael's Uniting Church) に行き、「賢人の集まり」(Sage Group) と呼ばれている会に参加します。毎週ではありません。教会は1月に1回この会を開きます。自尊心や怒りなどさまざまな感情についての研修会です。論文を読み合います。この研修会で、自己啓発をしたり、助け合いをしたりしています。夕方はあまり外出をしません。別の読書会にも入っていて、それは1月に1回夕方に開かれます。これに出席するときには夕方も外出をします。私には孫が7人います。一番上は18歳で、

一番下は3ヶ月です。孫のコンサートに行くときは、夕方でも外出します。

土曜日に、3人の息子と年長の2人の孫と一緒にオーストラリアン・ルールズ・フットボール (Australian Rules Football, ビクトリア州を中心におこなわれているオーストラリア独自のフットボール) の試合を見に行きます。一緒に行く中で、私がつだ1人の女性です。息子の妻たちがときどき一緒に行くこともあります。息子の妻たちはフットボールに興味はありませんし、小さい子供たちの世話をしなければいけませんから、そんなに頻繁には行きません。帰宅してから、私はテレビを見ます。

日曜日は、午前8時50分のバスに乗って、都心にあるセント・マイケル教会に行き、ミサに参加します。宗派はユナイティング教会です。いろいろな理由から1人で教会に来る人たちのグループがあります。ミサの後、そうした人たちと昼食を一緒に食べます。セント・マイケル教会には牧師のマクナブ師 (Dr. Francis Macnab, 牧師であるだけでなく、カウンセリングも積極的におこなっている著名な人物) がいます。彼はとてもおもしろい人物です。そのために、わざわざ都心にあるセント・マイケル教会に行きます。そして、午後3時頃に帰宅します。

私は2つの読書会に入っていますから、たいてい夕方は外出しないで、家で読書します。テレビを見たりもします。子供や孫たちとは昼間に会います。昼食に子供のところに行くこともあります。こうして見ると、夕方は退屈な時間のようなですね。

庭の手入れは庭師にやってもらっています。1ヶ月に1度、掃除の人に来てもらって、家の掃除や芝刈りなどをやってもらっています。一人暮らしをしています。

35年間、この家に住んでいます。子供たちがこの家に住んでいたときは、それはとてもにぎやかでした。子供たちが独立して家を出て行った今では、とても静かになってしまいました。5人の子供ができました。4人の息子と、1人の娘です。4番目の子供は3年前に皮膚ガンのために36歳で亡くなりました。子供たちは、48歳、43歳、41歳、38歳です。2番目の子供が娘です。息子が死んでから3年間、カウンセラーのもとに通っています。私にはカウンセリングがどうしても必要です。カウンセラーとは仲がよく、カウンセラーは私の子供たちの名前や私が何をしているかなどを知っています。家族内で起こる誤解などをカウンセラーと話し合っ、それをどのように修復するかなどを相談します。また、子供や孫たちともっと会ったほうがいいかなどを相

談します。

テレビを見ながら、自分で料理をします。月曜日の夜が好きです。月曜日の夜には、テレビでオーストラリアン・ストーリー (Australian Story, オーストラリア人の伝記を紹介する番組)、フォー・コーナーズ (Four Corners, 時事問題を追求するドキュメンタリー番組)、アンドリュー・デントン (Andrew Denton, Enough Ropeという番組に出演している人気のあるインタビュアー) の番組があります。クイズ、ドキュメンタリー、政治的なものといったリアリティのある番組が好きです。ラジオを聞きますが、それほどよくは聞きません。ペットはいません。夜は10時から10時半の間に寝ます。

息子が死んでからは、娘とその家族と旅行をしています。1人ではしていません。今年の7月にもアリス・スプリングス (Alice Springs, 北部準州の南にある町。近郊にはエアーズ・ロックなどの観光地がある) に娘とその家族とで行きました。娘夫婦はバイロン・ベイ (Byron Bay, ニュー・サウス・ウェールズ州の北の端にある、海に面した町。人口約5000人の小さな町) に別荘を持っています。1年に1度そこに行きます。

地域の医者、歯医者、美容師のところに行くこと以外に決めてやっていることといえば、友人と約束をして会うとか、読書会に出るとか、リレーションシップス・オーストラリアのものと同僚と会うことくらいです。それから、気が沈んでいるときなどに、ブライトン (Brighton, メルボルンの中心から南東に10キロのところにあるサバープ) やエルスタンウィック (Elsternwick, メルボルンの中心から南東に9キロのところにあるサバープ。グレン・アイラ市の一部) の映画館へ行きます。映画は1人で見ます。最近の映画では、Look Both Ways (2005年に封切られたオーストラリア映画。さまざまに傷ついて、絶望した人々の人生を1週間にわたって追った映画) がお薦めです。映画を見て、気分転換をします。

夫が死んでからは、孤独感を感じます。夫はいつもそばにいない必要はありませんが、夫がいることで精神的な安定感があります。それは、物理的に安全であるというわけではありませんが。夫とはいつでも話をすることができます。夫が死んでからは、ひとりぼっちになりました。話し相手がおらず、不安となったので、カウンセラーに頼るようになりました。カウンセラーは、「心配することはないよ」とか「そんなことは問題ではないよ」などと言ってくれます。長男に家を売ってしまうかどうかなど金銭的なことは相談をします。でも、子供たちに迷惑をか

けたくありませんから、ささいな個人的な心配を子供たちに話すことはありません。そういったことはカウンセラーと話します。

自分を元気づけるために、他の家の庭を見ながら歩きます。私は背骨が悪いのですが、歩くことは背骨には一番いい運動です。治療に、カイロプラクター（脊柱指圧療法師）のところに行っています。私は今年72歳となりました。夫が死んだ歳となりました。

②ライフ・ヒストリー

私はメルボルンのバーウッド（Burwood, メルボルンの中心から東に12キロほどのところにあるサバブ）で生まれました。3歳下に妹がいました。父親は銀行のマネージャーでしたので、転勤が多かったです。サーリー・ヒルズ（Surrey Hills, メルボルンの中心から東へ12キロ・メートルほどのところにあるサバブ）から地方へ転勤となったので、全寮制の学校へ入れられました。3年間、寄宿舎にいました。寄宿舎はいやでした。妹も全寮制の学校に入りましたが、いやで逃げ出しました。その後、父親はメルボルンへ転勤となりました。父親は、まずアルバート・パーク（Albert Park, メルボルンの中心から南へ数キロのところにある都心近くのサバブ）、その次にサウス・ヤラ（South Yarra, メルボルンの中心から東へ数キロのところにある都心近くのサバブ）で働きました。父親がメルボルンで働くようになったので、寄宿舎を出て、普通の学校へ入りました。17歳で学校を終え、受付係（receptionist）として働き始めました。私が20歳のときに、父親が亡くなりました。そこで、母親、妹、私は銀行の社宅を出て、ブライトンに住みました。

15歳のときから、私は学校の休みの間アルバート・パークにある衣料品店でアルバイトをしました。そのアルバイトの終わりの頃に、夫のルーと知り合いました。私は16歳でした。夫は大学生で、

アルバートパークでアルバイトをしていました。彼は私をデートに誘ってくれ、それからは2人で頻繁にデートをしました。路面電車に乗ったりして、デートをしました。ルーはプレゼントにくしなしの花の小箱をもって家に来てくれました。21歳のときに、ルーはロンドンに行ってしまいました。私はルーとの関係が終わってしまったと思い、悲嘆にくれました。でも、私が21歳のときに、ロンドンにいるルーから手紙が来て、彼は私に結婚を申し込んできました。ルーは婚約指輪のお金と船賃を送ってきました。22歳のときに、船でロンドンへ渡りました。私たちは、ロンドンで結婚をしました。結婚後、2年間ロンドンに住みました。私はそこでタイピストとして働きました。2年の終わり頃に、妊娠をしました。そして、メルボルンに戻りました。その当時は、行きも帰りも船でした。メルボルンではハンプトン（Hampton, メルボルンの中心から南東に15キロ・メートルほどのところにある、海に面したサバブ）にまず住みました。1957年、私が24歳のときに、最初の子供（長男）が生まれました。1961年に、ブライトンに移り住みました。長男が4歳のときです。ルーは建物の設計をしていました。住宅建設でなく、商業施設の建設に関心があったので、ずっと大きな建設会社に勤めていました。長男が生まれてから5年して、次の子供が生まれました。2番目の子供からは2年間隔で次々と子供ができました。1967年に現在住んでいる家を買いました。一番下の子供サムが2歳のときです。この家には、36年間住んでいます。庭がとても広く、家族向けの住宅です。

一番下のサムが6歳になって、学校に上がるようになってから、私は市役所のやっているミールズ・オン・ウィールズ（Meals on Wheels, 買い物や料理ができない老人などに食事を自宅に届けるサービス。ビクトリア州では地方自治体やコミュニティ・ヘルス・センターがこれを実施している）の監督

表4 ジュディスさんの年譜

年 (年齢)	出来事
1933年 (0歳)	出生
1950年 (17歳)	学校を卒業し、働き始める
1955年 (22歳)	ロンドンに渡り、結婚をする
1957年 (24歳)	オーストラリアに帰国する。一番目の子供が生まれる
1967年 (34歳)	末の子供が生まれる
1973年 (40歳)	ミールズ・オン・ウィールズの監督として働き始める
1978年 (45歳)	カウンセラーになるための訓練を受ける
1980年 (47歳)	カウンセラーとして働き始める
1996年 (63歳)	カウンセラーの仕事をやめる
2002年 (69歳)	夫と息子が死亡

として働くようになりました。私はずっと教会に係わってきました。私たちはボランティアとして寄付集めなどの福祉活動をしました。活動に係わっていた私たちは福祉の仕事に関心があったと思います。他の人のために何かをしてあげたいという基本的な欲求を持っていました。私たちは教会で寄付集め以外のこともしました。ブックフェアを開くためにいろいろなところから本を集めたり、さまざまな分野の講師を招いて「視点」(viewpoint)という一連の講義をしてもらったりしました。市役所の福祉担当者を講師に招いたとき、私はその人に働きたいと言いました。そうしたら、その人から私に電話がありました。市役所がミールズ・オン・ウィールズをやることになったので、私にその監督になりませんか、私に聞いてきました。私が教会のことにいろいろ係わってきたので、私に声をかけてくれたのでしょう。それで、ミールズ・オン・ウィールズの監督の仕事に就きました。6年間、その仕事をしました。

ミールズ・オン・ウィールズの仕事をしていた最後の1年間、私はマリッジ・ガイダンス・カウンセラー (Marriage Guidance Council) というところで1週間に1日カウンセラーになるための訓練を受けました。その団体は当時マリッジ・ガイダンス・カウンセラーという名前でしたが、今ではリレーションシップス・オーストラリアと呼ばれています。訓練に通うために、市役所は1週間に1日休みをくれました。1年後にミールズ・オン・ウィールズの監督の仕事をやめて、カウンセリングにエネルギーを集中しました。私はベテランのカウンセラーのカウンセリングに立ち会ってカウンセリングを聞き、カウンセリングにも参加するように求められました。この実習を1年間して、カウンセラーとなりました。現在ならば大学で社会福祉か心理学の学位を取った後に実習をして、カウンセラーになりますが、当時はそうではありませんでした。選抜されて、訓練を受けて、実習をして、カウンセラーになったのです。実習の後、週に4日パートタイムでカウンセラーとして働きました。その後、週に3日の勤務に変えました。20年間近く、リレーションシップス・オーストラリアで働きました。仕事はとても楽しいものでした。仕事は、人生で中心的な活動でした。

私が63歳のときに、心臓の調子が悪くなってカウンセラーの仕事をやめざるをえなくなりました。心臓の調子が悪くなったために、発作が起り、ペースメーカーをつけるということになりました。63歳のときに、心臓の鼓動がおかしくなった最初の兆候がありました。鼓動が速くなり、息が切れるよう

になりました。私は治療を受けました。それで、私はもう働けないと思いました。心臓の鼓動がおかしくなったことは、私の仕事や人の感情を扱うことであることとも関連しています。他の仕事でしたら、もっと続けられたかもしれません。カウンセラーの仕事はクライアントと直接に接するものですから、(私の感情が高ぶることがあります)。私は仕事で燃え尽きてしまった (burn-out) と感じました。仕事をやめたときは、悲しく思いました。2000年に、心臓発作がありました。以前からペースメーカーをつけて、心臓が規則正しく打つようにしておけばよかったのですが、それをつけていませんでした。今はペースメーカーをつけて、心臓が規則正しく打つようにしています。血液をさらさらにする薬を飲んでます。発作の後、ちゃんと歩けるようになるまで、かなりかかりました。足が弱りました。今でも、まだそうです。また、発作の後、方角の感覚を少し失いました。そのために、しばらくの間、車を運転しませんでした。今では車の運転をしますが、近所に行くときだけです。私の健康はそこなわれてしまいました。

ルーは70歳まで働き、その翌年に亡くなりました。死ぬ1年前に、ルーは重い白血病と診断され、入院をしました。集中的な化学療法を3ヶ月間受け、そのあと小康状態が6ヶ月間続きました。そこで、ルーはこの家に戻りました。これ以上の化学療法を受けることを望みませんでした。3ヶ月後に、ルーは亡くなりました。夫が病気の間、子供のティムが夫妻でこの家に一緒に住んでくれました。子供のサムも夫婦でこの家に来て一緒に住んでくれました。ルーが入院している間、いつも誰かがこの家に来てくれました。夫が亡くなってからは、子供夫婦が私と一緒に住むということはありません。子供たち夫婦には自分たちの家族がありますし、自分の生活もあります。私はもう大丈夫です。私は夫が死んでもおびえたりはしませんでした。孤独になりました。

若い頃は、家事や育児を手際よくやりくりしました。地元の新新聞にお手伝いさん募集の新聞広告を出して、お手伝いさんを雇いました。そして、お手伝いさんには夕食を作ってもらいました。ですから、私が帰宅すると、夕食ができていようになっていました。子供たちはすぐに夕食を取ることができました。雇ったお手伝いさんのうちの1人はとても料理が上手でした。上の2人の子供を一番下の子供の学校に寄せ、一番下の子供と一緒に歩いて帰るようにさせました。午後4時には、お手伝いさんが家に来てくれるようになっていました。ですから、子

供が帰宅したときには、いつも誰かが家にいるようになっていました。一番上のアンソニーは二番目の子供よりも5歳年上ですから、下の子供たちをよく世話をしました。

子供は4人が男の子で、1人が女の子です。息子たちは家でいろいろと言います。娘は1人だけですから、息子たちに圧倒されて、支配されていると感じていました。娘は両親に無視をされ、十分に自分の世話をしてもらっていないと感じていました。私たちは何かにつけて娘を気づかしていましたから、本当はそうではないのですけれど。

この家に引っ越してきてから、子供たちは教会の日曜学校に行きたがらなくなりました。そこで、私たち夫婦だけで教会に行くようになりました。私たちは以前ほど頻繁に教会に行かなくなり、教会にあまり係わらなくなりました。子供たちが家を出てから、私たち夫婦は都心にあるユナイティング・チャーチに行くことにしました。そうしたら、教会に行くことがとても楽しいものになりました。

夫は70歳まで働き、病気となって翌年亡くなりましたから、退職後に夫婦ですばらしい休暇をすごすということはありませんでした。ただし、ルーは商業施設の設計をしていたので、仕事で外国に出張することが多くありました。アメリカのシカゴやニューヨークへはしばしば行きました。私は夫の外国出張と一緒にいて行きました。出張したときに、ついでに別の都市にも行ったりしました。例えば、シカゴに出張で行ったときは、ニューオリンズに立ち寄り、フィジー経由でオーストラリアへ戻ったりしました。夫が休みを取って、私たち夫婦は友人たちとスペイン、イタリア、モロッコにも行ったことがあります。夫は旅行が何よりも好きでした。余分なお金があれば、旅行に使っていました。退職後に、夫婦で旅行ができなくて残念です。

夫が亡くなった5ヶ月後に、三男のニックが死にました。36歳でした。夫と三男が同じ年に死んで、つらい思いをしました。ニックはその10年前に皮膚ガンにかかり、ガンを取り除く手術を受けました。ニックは亡くなる5ヶ月前に皮膚ガンと診断されました。2度目の皮膚ガンでした。予想外のことでした。ガンが全身をむしばみました。ニックに子供がいなかったのは、幸いなことでした。夫が死んだ2ヶ月後から、私はカウンセリングを受けるようになりました。そのとき、ニックは既に病気にかかっていた。ニックは初めしばらく入院をしていましたが、その後この家にしばらくいました。そのあとで、長女のジェインの大きな家に行きました。ジェインが、病気がとても重くなるまでニックを看病し

ました。(病状が悪化してからは、)ニックは病院にいました。セント・マイケル教会の牧師のフランシス・マクナブ師は病院にニックを訪ねてくれました。ニックが死んだときは、マクナブ師は私を訪ねてくれました。私は夫やニックが死んだことを子供たちと話しました。でも、その当時は霧の中のように頭がぼんやりしていました。私たちは夫とニックそれぞれの火葬と葬儀を終えてこの家に戻ってきたときに、皆でテーブルを囲んですわり、食事をし、酒を飲みました。奇妙な時間でした。

カウンセリングは私の精神的な回復に役立つので、私はカウンセリングを受けています。私は自分の感情に触れ、カウンセラーのところに行ってもどのように感じるかを話します。カウンセリングで癒されることはありますが、自分で自分を癒すことはできません。癒されるためには、どうしても他人が必要です。そして、亡くなった人たちのことを思いめぐらします。人を失うということは永遠のことです。人を失うことで、何もできなくなってしまう。まったく違った人生となってしまいます。時間だけが、それを解決してくれます。夫やニックの死を受け入れて、適応できるようにだんだんとなってきています。

数週間前から、高齢者用の施設に住むことを考えるようになりました。専用の居住空間のある集合住宅(unit)で、共有の施設のあるものの方がいいと思います。他の入居者と会って、コーヒーを飲めるような、そんな施設を探しています。いくつかを見ましたが、家に帰ってきて考えてみると、みなちょっとどうかと思ってしまう。もっとフレンドリーな施設を探しています。おそらく専用の居住空間のある集合住宅がいいでしょう。多くのそうした居住空間があるような高齢者用の施設です。入居者とあいさつをしあい、他の入居者が留守の間、代わりに花に水をやりたりできるようなところです。コミュニティとして入居者が和気あいあいとまとまって暮らしているような施設を探しています。こんなことを少し前から考えるようになりましたが、結論を出すまでには時間がかかるでしょう。(この聞き取り調査の後ほどなくして、ジュディスさんは住宅を売り、高齢者用の施設に移った。)

③何に幸福を感じるか

他の人と話すこと、他の人と触れあうことが、最も満足を与えてくれます。それは、人のところに行って話しをしてもいいですし、電話で話すのもいいですし、教会の集まりに行くのもいいですし、買い物に行くのでもかまいません。買い物のときに、

特別なことがなくてもいいです。買い物はコールズ（Coles, オーストラリアの大手のスーパーマーケット）でもいいですし、この近くの通りにある商店でもいいのです。そこで、ちょっとコーヒーを飲むかもしれません。ちょっと外出をしたりすることです。

何もせずに年老いてゆくのではなく、目的を持って生きていたいと感じていたいと思います。水曜日にボランティアの仕事をするのはそのためです。その中に目的があると感じられる活動を探しています。退職をしたときに、コミュニティ・インフォメーションのボランティアを始めたり、CAEで哲学の授業を受講したりしました。私は哲学の授業が好きですが、CAEではそうした授業は開講されず、コンピューターの講習のようなものが開かれるようになりました。老人大学では哲学の授業があるので、受講してみたいと思います。

子供たちはすべてメルボルンに住んでいます。小さい孫たちは広いこの家が好きで、ここによく来て遊んでゆきます。でも、16歳から18歳の大きい孫たちは小さい孫たちほど頻繁にはこの家に来ません。彼らには自分の人生やスポーツがあります。それで忙しいのです。小さい孫たちはこの家に来ると、ほうきで遊んだり、鉛筆でいろいろ書いたり、この家にある同じ本を何回も読んだりしています。この家は小さな孫たちには合っていて、孫たちはこの家が大好きです。大きい孫たちは4人います。16歳から18歳です。私が彼らを訪問したり、彼らのコンサートに行ったりします。孫の男の子はときどき

この家に来ます。一番年上の孫は18歳の男の子です。彼は、1人か2人の友人を連れて毎週土曜日にこの家に来ます。彼は、クリケットをした後に、その仲間を連れてきます。この家に来るときは、ミートパイを持ってきます。彼はとても律儀にこの家に来てくれます。娘の子供たちはこの家に来ないので、私が娘の家を訪ねたときに会います。私は大きい孫たちと一緒に何かをすることといったことはありません。

娘はブライトンに、息子はアルバート・パーク、リッチモンド（Richmond, メルボルンの中心から東へ数キロの都心の近くにあるサバープ）、アルフイングトン（Alphington, メルボルンの中心から北東へ6キロのところにあるサバープ）に住んでいます。子供たちは皆メルボルンにいます。妹のジャネットはブライトンに住んでいます。

私は人々との結びつき（relation）に満足を感じます。人々と話をしたりすることです。工芸をするとか絵を描くといったような、特別な趣味といったものは私にはありません。同じ年齢の人たちと交流することに満足を覚えます。友人のマーガレットは夫を亡くしましたが、他の友人たちの夫はまだ健在です。ですから、私がマーガレットに電話をしたり、彼女が私に電話をかけてきたりします。彼女が「ショックだ」と言ってくると、わたしも「とてもショックだ」などと言って、ぐちり合います。私たちは互いに助け合います。私がマーガレットの家に行ったり、マーガレットがこの家に来たりもします。